

鼻

芥川龍之介

青空文庫

禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から頤の下まで下つている。形は元も先も同じように太い。云わば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下つているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が碗の中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとつても、持上げられている内供にとつても、決して容

易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。——けれどもこれは内供にとって、決して鼻を苦に病んだ重なる理由ではない。内供は実にこの鼻によって傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと云った。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さえあつた。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたと思つていない。内供の自尊心は、妻帯と云うような結果的な事実には左右されるためには、余りにデリケートに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようとした。

第一に内供の考えたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のない時に、鏡へ向つて、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換えるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖をついたり頤の先へ指をあてがったりして、根気よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも

満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえって長く見えるような気さえた。内供は、こう云う時には、鏡を箱へしまいながら、今更のようにため息をついて、不承不承にまた元のきようづくえ経机へ、かんのん観音ぎよう経をよみに帰るのである。

それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧そうぐ供講説などのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従つてここへ出入する僧俗の類たぐいも甚だ多い。内供はこう云う人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたからである。だから内供の眼には、紺の水すいかん干も白の帷かたびら子もはいらない。まして柑こ子色うじいろの帽子や、椎しい鈍にびの法衣ころもなどは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。——しかし鍵かぎ鼻はなはあつても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従つて、内供の心は次第にまた不快になつた。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下つている鼻の先をつまんで見て、年とし甲斐がいもなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされての所しよ為である。

最後に、内供は、内典ないてん外典げてんの中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめ

ても幾分の心やりにしようとさえ思つた事がある。けれども、目連もくれんや、舍利弗しゃりほつの鼻が長かつたとは、どの経文にも書いてない。勿論竜樹りゅうじゆや馬鳴めみようも、人並の鼻を備えた菩薩ぼつである。内供は、震旦しんたんの話の序ついでに蜀漢しよくかんの劉玄德りゅうげんとくの耳が長かつたと云う事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どのくらい自分は心細くなるだろうと思つた。

内供がこう云う消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。烏瓜からすうりを煎じて飲せんんで見た事もある。鼠いばりの尿を鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上にぶら下げているではないか。

所がある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上つた弟子でしの僧しるべが、知己の医者から長い鼻を短くする法を教くわつて来た。その医者しと云うのは、もと震旦しんたんから渡つて来た男で、當時は長樂寺ちやうらくじの供僧くせうになつていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは氣にかけないと云う風をして、わざとその法もすぐによつて見ようとは云わずにいた。そうして一方では、気軽な口調で、食事の度毎に、弟子の手續をかけるのが、心苦しいと云うような事を云つた。内心では勿論弟子の僧が、自

分を説伏せて、この法を試みさせるのを待っていたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそう云う策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのである。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聴従する事になった。

その法と云うのは、ただ、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませると云う、極めて簡単なものであった。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提に入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷する惧がある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云った。

——もう茹つた時分でござろう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思ったからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤の食ったようにむず痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立っている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのぼしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時々気の毒そうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を云つた。

——痛うはござらぬかな。医師は責めて踏めと申したで。じゃが、痛うはござらぬかな。内供は首を振つて、痛くないと云う意味を示そうとした。所が鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、上眼を使つて、弟子の僧の足に輝のきれているのを眺めながら、腹を立てたような声で、

——痛うはないて。

と答えた。實際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりもかえつて気もちのいいくらいだったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒のようなものが、鼻へ出来はじめた。云わば毛をむしつた小鳥をそつくり丸炙にしたような形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう云つた。

——これを鑷子でぬけと申す事でござつた。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙って弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子けぬきで脂あぶらをとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の茎くきのような形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような顔をして、

——もう一度、これを茹でればようござる。

と云った。

内供はやはり、八の字をよせたまま不承らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになつていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻と大した変りはない。内供はその短くなつた鼻を撫なでながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極きまりが悪るそうにおずおず覗のぞいて見た。

鼻は——あの顚あしの下まで下つていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅わずかに上唇の上で意気地なく残喘ざんぜんを保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれ

た時の痕あとであろう。こうなれば、もう誰も晒わらうものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはいかないかと云う不安があった。そこで内供は誦ずぎ経する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そつと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀ぎようぎよく唇の上に納まっているだけで、格別それより下へぶら下つて来る景色もない。それから一晚寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華経書ほけきよ写の功を積んだ時のような、のびのびした気分になった。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍さむらいが、前よりも一層可笑おかしそうな顔をして、話も碌ろくろく々々せず、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そのみならず、かつて、内供の鼻を粥かゆの中へ落した事のある中童子ちゆうどうじなどは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑おかしさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふつと吹き出してしまった。用を云いつかつた下法師しもほうしたちが、面と向っている間だけは、慎つつしんで聞いていても、内供が後うしろさえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

内供ははじめ、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。——勿論、中童子や下法師が晒わらう原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ晒わらうにしても、鼻の長かった昔とは、晒わらうのにどことなく容ようす子がちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑こっけい稽けいに見えると言いえば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのようにつけつけとは晒わらわなんだて。

内供は、誦ずしかけた経文をやめて、禿はげ頭を傾けながら、時々こう眩つぶやく事があつた。愛すべき内供は、そう云う時になると、必ずぼんやり、傍かたわらにかけた普賢ふげんの画像を眺めながら、鼻の長かった四五日前の事を憶おもい出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまうのである。——内供には、遺い憾かんながらこの間に答を与える明が欠けていた。

——人間の心には互に矛盾むじゆんした二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸おとしいに陥おとしれて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあ

るが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからにほかならない。

そこで内供は毎日に機嫌きげんが悪くなつた。二言目には、誰でも意地悪く叱しかりつける。しまいには鼻の療りょうじ治じをしたあの弟子の僧でさえ、「内供は法ほう慳けん貪どんの罪を受けられるぞ」と陰口をきくほどになつた。殊に内供を怒らせたのは、例の悪いたずら戯ざな中童子である。ある日、けたたましく犬の吠ほえる声があるので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片きれをふりまわして、毛の長い、瘦やせた彪むくいぬ犬を逐おいまわしている。それもただ、逐おいまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囁はやしながら、逐おいまわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひつたくつて、したたかその顔を打った。木の片は以前の鼻持はなもち上げの木だつたのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなつたのが、かえつて恨うらめしくなつた。

するとある夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸ふうたくの鳴る音が、うるさいほど枕かよに通つて来た。その上、寒さもめつきり加わつたので、老年の内供は寝つこうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふと鼻がいつにな

く、むず痒いのに気がついた。手をあてて見ると少し水気が来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花を供えるような恭しい手つきで、鼻を抑えながら、こう呟いた。

翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椽が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたように明るい。塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光っている。禅智内供は、蓐を上げた縁に立つて、深く息をすいこんだ。

ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰って来たのはこの時である。

内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から顎の下まで、五六寸あまりもぶら下っている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通り長くなつたのを知った。そうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じた。

——こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない。

内供は心の中でこう自分に囁いた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら。

(大正五年一月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1997（平成9）年4月15日第14刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「新思潮」

1916（大正5）年2月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年11月4日公開

2011年5月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鼻
芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>